
神城龍貴の日常

絳月葩鶴士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神城龍貴の日常

【Nコード】

N3653K

【作者名】

絳月葩鶴士

【あらすじ】

幼馴染

後輩

友人

依頼人

雇い主

色々な人間と一人の少年は様々な“出会い”と“別れ”を経験し、そして、やがては自分の“日常”へと帰っていく。

これは、神城龍貴という一人の探偵が生まれるまでの物語。

素朴なギモン（前書き）

これは連載ものとはうたっていますが、シリーズものであり、1話完結の物語です。

よって、ばらばらに読んでも一つだけ読んでも何ら支障はありません。

ご自由にお楽しみください。

素朴なギモン

——ねえ、貴方には信じられるモノってある？

僕はまだ、その答えが見つからないでいる。あの人とは、それ以来会っていない。

何も言えないまま、あの人はこの学校を去って行った。

彼女に初めて会ったのは、1年前。彼女、そのみやあかり園宮明日莉は、部活の先輩だった。名前の通り、明るく、優しい人だった。

僕は、彼女に恋をした。

でも、僕には彼女に想いを伝える事が出来なかった。僕の他にも、彼女を好きな奴がいたからだ。そいつはスポーツ万能、眉目秀丽、その上誰にでも公平で親切で、誰からも好かれる奴だった。そして、何より、俺の幼稚園の時からの親友だった。

それにひきかえ僕は、まあ成績は良かったけど、それでもトップクラスと言うだけで、クラスや学年でトップ、と言う訳でもないし、運動神経はないし、人見知りだし、根暗だし……。どう考えても、あいつの方が彼女を幸せに出来る。そう思っ、僕は身を引いた。いや、ただ彼女にフラれるのが、恐かっただけかもしれない。

兎に角、僕は彼女の前から姿を消した。

その後はどうなったかは知らなかったけど、多分上手くいったんだろう、そう思っていた。

彼女が卒業して一週間後、僕は偶然にも恋敵そいつ、神城龍貴かみしろたつきに出逢った。

「よお、龍貴。久しぶりだな」

「ああ、久しぶり。……ちょっと、話せないか？」

龍貴の様子がいつもと違ったので、大人しく彼に従い、俺達は近くのベンチに腰掛けた。

「あんな、俺……卒業式の日、あかり先輩に告ったんだ」

「っ……へ、へえ、そうだったんだ……」

やはり覚悟はしていても、実際聞くと辛いな……。でも、それにしては龍貴の顔が浮かないのは何故だろう？ その疑問は、彼自身の言葉によって解決された。

「でも、断られちゃったんだ。他に好きな人がいるんだと」

「そう……」

いやあ、参った参った。と笑う龍貴。だが、やせ我慢なのは見え見えだ。そうか……龍貴でもダメなんだ。やっぱり、俺なんかが好きになっちゃいけない人だったんだな。

「で、コレ、お前にだって」

「え？」

差し出されたのは一枚の紙切れ。え？でも、何で明日莉先輩が、僕に……？

沈黙に耐えきれなくなったのか、それとも、動揺している僕に知らしめるためだったのか、龍貴は吐き捨てるように、言った。

「……お前、さ。もっと自信持った方が良いよ。確かに、お前ばつと見は暗いし、何考えてんのかよくわかんないけどさ、中身は真面目で、誰よりも友達の事を想ってやれる良い奴だ。だから……、なもっと自分を信じてやれよ。お前、北原勇一きたはらゆういちとして、16年間、生きてきたんだろ？ お前がお前自身を信じてやらなかったら、お前を信じてくれている人達に悪いとは思わないのか？」

龍貴の言葉は、まさにその通りだった。僕は、“僕”と言う人間が一番信じられなかった。だから、こんな僕を信じてくれる人なんか、好きになってくれる人なんか、いないと思っていた。だが……ここに、僕を、北原勇一を、信じてくれる人がいる！

「ありがとっ、龍貴。やっと、解ったよ……。龍貴、やっぱり君は僕の親友だ。そういう、たまに熱くなるとこ、僕は好きだよ。でも……やっぱり、君はお人好しだね。」

「うっせーよ。それに、何今更言ってんだ。俺はお前と人生の半分、

いや、三分の二ぐらい、一緒に居るんだ。お前の事なんかお見通しなんだよ！……まあ、あれだ。お前にはいろいろ気い使わせちまつたしな。これでチャラだ。しっかりな、勇一」

再び礼を言つて龍貴と別れた後、彼から渡された紙切れを開いた。そこには、彼女の美しい字で、こう書かれていた。

“北原君へ。答えは見つかりましたか？見つかったら4月1日、あの桜の木の下で待っています。明日莉”

あの木か……。覚えていてくれたんだ。何も言わないから、忘れたものだと思つていたよ――

一年前。入学式終了直後。

僕はあまりの人の多さに酔つて気分が悪くなり、会場から少し離れた桜の木の下でうずくまっていた。一緒に来た龍貴ともはぐれ、帰り道も解らず途方に暮れていた時、

「どうしたの？」

と上から声がした。それが彼女だった。彼女は親切にも僕を駅まで送ってくれた。こんなに優しい先輩のいる学校なら、僕もやっていけるかもしれない、とこれから始まる学校生活への不安を吹き飛ばしてくれたのが、彼女だった。

そして、入学して一週間後。仮入部の時に、彼女を見かけた。元々は龍貴が入ろうと僕を誘ってきたのだが、結果的に僕の方から入ると言つて入部した。

だが、どうせ彼女は僕の事なんか覚えてないだろう、と何も言わないまま、記憶は忘却の彼方へと消えて行つたのだった。

――4月1日。早朝。

彼女はもう、そこに来ていた。僕は彼女の後姿に声をかける。

「先輩、覚えていてくれたんですね」

「ええ。いくらなんでも、入学式の日から死にそうになっている子を、忘れたりはいしないわ」

彼女は意地悪く微笑んだ。まあ、確かに、そりやそうか。

「あの時は本当にありがとうございました。」

「いいのよ。でも、驚いたわ。まさか再会するなんて思ってもみなかったし。私を追いかけたのかとも思ったけど、どうもそうではないみたいだし。こういうの、“運命”って、言うのかしらね？」そして再びにこつと微笑む彼女。その愛らしさに思わず声が出なくなるが、精一杯見栄を張って、精一杯言葉を紡いだ。

「……僕はそんなもの、信じちゃいませんから」

「では、君は何を信じているというの？」

……成程。流石、策士と恐れられただけの事はある、が……。僕は思った事を口にした。

龍貴曰く、僕は馬鹿正直らしいので。

「僕が信じているのは、皆です。そして、その皆が信じてくれる、北原勇一、僕自身です」

彼女は、まるでその答えを予測していたかのように、笑顔を崩さぬまま、言った。

「実に君らしい、良い回答ね。気に入ったわ。……ちなみに、神城君にも同じ質問を試みたんだけど、彼、何て答えたと思う？」

「……“勿論、貴女です”、かなあ？」

「あたり。私、そう言う回答は好きじゃないのよ」

龍貴はここ一番、って時に気障気取って外すからなあ。まあ、そこが良いところでもあるんだけど。

さて、その龍貴から折角チャンスをもたらったのだ。頑張らねば。

僕は勇気を振り絞り、言おうとした。

「先輩、あの「私ね、北原君の事、大好きなの。これから、仲良くしてくれない？」

「ええ！？は、はい。喜んで」

僕の一世一代の告白は、不発に終わった。が、結果として、何とも嬉しいお言葉を頂戴した。ので、良かった？のかな。だが、僕も男としての意地があるので、これだけは言わせていただこう。

「あの、僕、貴女の事、大切にします」

「ふふ、君のそういう所が好きよっ」

たったった。

先輩の足音と共に、花びらが舞い、僕と彼女との距離は近くなる。そして——ぎゅっ。

慣れていない事をしたり、あるいは慣れていない事をされたりすると、顔が真っ赤になるし、心臓がどくどく言う。紅くほてった頬を柔らかな春風と共に桜がすり抜ける。

一段落して、緊張がほぐれた僕は全身の力が抜け、視界が揺らぐ……。
どさっ。

どうやら僕はまた、先輩のお世話になるらしい。

僕はまだ弱い。

だから今の僕には、君を想うことしかできない。

君を守る事は、まだ難しい。

でも、強くなるから。

頑張っって強くなつて、君を守るから。

だから僕が君に追いつくその日まで、僕のそばでずっと、待っていてくれないか？

運命なんて信じない。

私は今まで、平凡な人生を送ってきた。

地元の幼稚園・小学校・中学校を無事に卒業し、家からそこまで遠くない某進学校に通っている。元々、ファンタジー的物語は好きではない人なので、世の中で言う所の

“運命の出会い”

とやらは信じていなかった。このまま、普通の大学に行き、中小企業に入社し、職場結婚をして家庭に入って……。せいぜいそのぐらいが私にふさわしいだろう、とまで思っていた。

ただ、一度だけ、中学の入学式の時に、たまたま隣の席になった男子と親しくなり、頻繁にメールのやり取りをする仲になった事があった。しかし、その人を好きになりそうになった矢先、朝私の友達と二人並んで楽しそうに話しながら登校しているのを目撃、あえなく玉砕。今のその人とは良い友達なのだが、もしかしたらその経験が私に“運命”を信じさせない理由の一つなのかもしれない。

さて、そんな私だから、あの人と最初に出逢った時も、一期一会だと割り切って、忘れてしまおうと努めていたのだが、まあ、今思えば、あれが“運命の出会い”とやらだったのかもしれない。

約二年前。高校に入学してから一週間ぐらい経った後の事だったろうか。あの日は朝から美しいほどに晴れ渡り、空は澄みきり、快晴と呼ぶにふさわしい天気だった。朝の天気予報でも、降水確率は10%だったし、お天気キャスターのお姉さんは、お布団干し日和だと言っていた。それなのに……。午後、太陽が南中すると同時に雲行きが怪しくなり、6限が終わるのとはほぼ同時に、雨が降ってきたのだ。誰が傘なんぞ持っていようか、いや、持っていない。生憎、置き傘もしておらず、“仕方ない、駅まで走って帰ろう”、と覚悟

を決め、昇降口から一步踏み出そうとした時、

「傘、持っていないの？」

後ろから声をかけられた。最初はそれが私に対して発せられた言葉とは思ひもしなかったが、周りを見渡してみるとそこには私とその人しかいなかった為、私は状況を把握する事が出来た。尤も、私には当時まだ友達と呼べるような人はおらず、そんな風に話しかけられる事はまずない、と思ったので、大分驚いたが。しかも、相手はどうやら上級生らしい。見知らぬ上級生が何故？と思いつつも、あまり黙っていると不快感を与えかねないので、私はとりあえず、質問に答える事にした。

「……はい。だから、走って帰ろうかと」

「こんな雨の中？風邪ひいちゃうよ。俺の傘使って」

「え……？でも、貴方が」

「いーのいーの。俺は友達に入れてもらうから。はい」

「たーつきー、帰るぞー」

「じゃ、気をつけてね」

いつの間にか、その人はいなくなっていて、私の手は傘を握りしめていた。

世の中には人の良い人がいるのだな、と素直に感謝しつつ、その日は濡れずに家まで帰る事が出来た。

それから一週間。私は毎日鞆の中にその傘を入れていた。何故なら、かろうじて学年は上履きの色から推察するに一つ上の二年生である、という事は解ったものの、あまりにも突然の事で、名前を聞くのを忘れてしまったのだ。かろうじて、下の名前が「たつき」である事は覚えているのだが……それだけでは、探しようがない。上級生のクラスを一つ一つ回って、という度胸も、残念ながらない。だからこうして、また会ったらいつでも返せるように、と持ち歩いているのだが……。全校1000人を超えるこの学校では、早々会えるものではないらしい。はて、どうするか、と諦めかけたその時、

「やあ」

私はその人と再会した。

しかも、帰りがけ、下駄箱で。

……そうだ。ここで会ったんだから、兄弟学級ではないか。今まで気付けなかった自分の浅はかさに絶望しつつも、今返さなければ次はない、と、私は彼に傘を返す。

「ああ。わざわざありがとう。」

笑顔でそう言い、じゃ、また。とまるで次があるかのように彼は去って行ったが、わざわざありがとう、はどう考えたって私のセリフだ。というか、私の事、覚えていてくれたんだ……。また名前は聞きそびれてしまったが、笑顔の素敵な格好良い人だった。

私は、二目惚れした。

その後、再び彼を見たのはなんと、生徒集会の時。その日は生徒会の役員決めで、彼は生徒会長に立候補していた。優しくて、格好良くて、生徒会長にまでなってしまうなんて……。

私は本格的に、彼に恋をし始めた。

それからというもの、廊下や下駄箱であつた時は、私から挨拶をするようにし、時折、途中まで一緒に帰ったり、アドレスの交換をした時ぐらいに、私も、生徒会に入った。彼はもう任期でいなくなるというのに。

自分でも何故だかわからなかったが、彼と同じ景色を見ていたいというのが、理由にあつたのかもしれない。実際、その頃私は彼が好きだと言った小説や映画を片っ端から見たりしていたし。その頃から、彼が受験勉強の為に疎遠になってしまったから、その淋しさを埋める為でもあつたのだろう。また、彼の格好の良さは誰もが認める事だったので、陰ながらファンクラブを学校裏サイトに作ってみたら、218人集まった、というのは紛れもない事実だったりもする。

そんな訳で、競争率の高いながらも、私は私なりに努力した。

バレンタインデーにもちゃんとチョコレートを贈ったし、お返しも来ていた。

……尤も、彼はくれた人全員に違うものをお返しした、という噂は流れたが。

でも……。諦めたくはない。やっとつかんだ、つかみかけた運命なのだ。これを逃したら、もう、チャンスはない。

卒業式終了後。柔らかい風が吹く中、あの人を待つ。でも特に連絡をした訳ではない。だから、後は運次第。あの人が去ってしまう前に、せめて……。

嗚呼、神様が本当にいると言うなら、どうか彼に会わせて……。

風が一層、温かく、やわらかくなった気がした。

「よお、どーした？」

温かい笑顔、今日は一段と輝いて見える。

もう一度、“運命”とやらを信じてみようと思った。

「あの、先輩、私、先輩の事が……」

眼を開けて、勇気を振り絞って、花束と共に想いを伝えようとした、その瞬間――

『かみしろせんぱーいー!!』

女生徒の雪崩の中に、彼――神城龍貴は消えてしまった。

「……やっぱり、運命なんてないのかしら？」

それは、彼女をたたき落とすのに十分すぎる事故だった。

その後、彼女がIT系の社長に見初められ、世界をまたにかける玉の輿になるのは、また、別の物語。

クロスロード

In教室

「えー、この部分のポイントですが……」

腹は満たされ、心と体は疲れ切った、6時間目の授業。教科書にもノートにも黒板にも文字がびっしり羅列されている。ぼーっとした頭には、それらはただの催眠の術式にすぎない。駄目だ、眠すぎる……。

クラスの8割が夢の世界に行った、もしくは行きかけている中、先生だけは羅列された文字を食いつくさんとばかりに、黙々と評論文の解説をしている。ご苦労なこった。

高校に入ってから今まで、授業中に寝た事の無い事を誇りにしていた俺だったが、流石にこれは寝ても良いだろう、と教科書を机の上に立て、腕を枕に惰眠を頼張ろうとしたまさにその時！

「えー、じゃあ次。7行目から……神城、読んで」

ええー何でこのタイミングで！？ しかも何で俺？ 今日13日じゃないでしょー？ ……あ、今日23日だ。しまった。いつも出席番号の人しか当たらないから、何週かに一度やってくる下1けたあっている人も道連れルール（仮）を忘れてた！ とはいえ、こんなんで成績下げられてもつまらないので、俺は面倒ながらも無難に指定された区域を読んだ。

「おし、よく読めたなー。偉いぞー」

……俺は小学生、否、幼稚園生ですか？ そんなんで褒められてもちっとも嬉しくないですよー。何人かが俺の顔をにやにやと見てきたが、するー。俺は被害者だ……！

「えー、では、この文章で作者が主張したい事です……」

再び自分の世界に戻った先生は、その後二度と俺達にからもうとはしませんでした。

めでたし、めでたし♪ ……まあ、俺寝られなかったけどね？

大して重要でもないH Rを聞き流し、掃除を適当に終わらせ、足早に帰宅部部长も真つ青な早さで、教室を去った。そして、靴を履こうと下駄箱に手を伸ばしかけた時、

「こら龍貴！ 何やってんの？！」

後ろから怒鳴られた。声の主は振り向かなくとも解つたので、あえて振り向かない。

今日は溜まっているアニメを見るんだ……。再び、靴に手を伸ばす、と

ガシッ。

まるで手錠てわづでもかけられたみたいに、俺の腕は動かなくなる。つか、背後に足音もなく忍び寄るとは……。お前は暗部か！

「……桐西きりにし、見逃してくんね？今日は用事が……」

「だーめ。今日こそ書いてもらうんだからっ」

身長差を感じさせない足取りで（俺と桐西の身長差は頭一つ分、約20？ほどあるにも関わらず）、俺は桐西に拉致られた。

あ——れ——。

A 書道室

「あ、きーちゃん！ おつそーい！！ 皆待つてたんだよ？」

「ごめんごめん。でも、ほら、ちゃんと代わり連れてきたから」

「あ、真晴、怪我して筆持てないんだっけ？」

「えー。きーちゃんの字、楽しみにしてたのに」

「ごめんねー。でも大丈夫。見ればわかるよ。ほら龍貴！ さらっ
と書きちゃって！」

「へいへい」

仕方ないな……。でも、筆なんか持つの久しぶりだな。つか、女ばつかでやりづら！ 全く、よく平気だよな……。

桐西真晴きりにしなまはる。人呼んできーちゃん。身長の低さと童顔、更には、未だに声変わりに至らない声がいまって、一見女にも見えるが、歴とした男である。本人はあまり気にしていないようだが、俺も最初

に会った時には面食らったものだ。

所属：書道部。一応部長らしい。獲った賞状は数知れず……かなりの実力者である事は確か。

特技：おせっかい。これがあるから、本当に女と見分けがつかない。

そんな桐西だが、何故か俺と気が合い、ちよくちよくこうやって厄介事に巻き込む。

まあ、俺もそこまで嫌な訳じゃないから、一緒にいるんだけどな、つと。そうこうしているうちに、一応、作品（と呼んでいいのかは分からないが）は完成した。あいつに言われたとおり、さらつと書いていただけだったが。

「おお、さっすがあ。上出来だよ」

「何これ！？ めっちゃ上手いんですけどお。あんた、何者？」

気が付くと、俺は書道部員達に囲まれ、質問攻めにされていた。

それを、桐西が満足そうに見つめているのを、俺は見逃さなかった。

On 帰り道

「桐西……、お前、図つたな？」

「？ なあんのことお？」

「……。お前、右手怪我なんかしてないだろ？ 怪我してたんなら、俺を引きずって、4階の書道室までつれていけるはずがない。いくらお前でも、な」

「あーあ、ばれちゃったかあ。流石、たっちゃんだね」

「何でだ？ お前、アレ書くの楽しみにしてたじゃないか」

アレ、とは今回俺が書かされた文化祭の看板の事である。

「ああ、良いの良いの。たっちゃん、どーせ今年も、文化祭まともに参加しないんでしょ？ その所為で、皆に良く思われてないの、知ってた？」

「知ってるも何も……」

面倒事に巻き込まれないようにわざと、そうしているのだ。

「たっちゃん、超が付くほど頭良いしー、かつこいいしー、優しいのに、誰もその事知らないでしょ？　それが何かもどかしくってさー」

「だからって……」

「皆にも認めてほしいんだ。たっちゃんの事。今認めてんの、きつときーとゆー君と崎先生ぐらいだよ？」

にへらと笑って言う桐西。つか、認めているのがお前と幼馴染と担任の先生だけって……。さすがにもうちよつというわ！　でも……言ってる事は正しいな。

「……わーったよ。少しは協調性持つようにする」

「うんっ」

その時の笑顔は、その童顔に似合った屈託のない可愛らしい笑顔だった。

L a t e r

俺の書いた看板は校門近くにでん、と置かれ、皆に注目される事になった。同時に、その噂が広まり、俺はクラスの看板から宣伝用のビラ、パンフレットに至るまで、ありとあらゆる文字を書かされる事に。まあかなり疲れたが、それでも、何もしなかった去年よりは大分気持ち的には楽になった気がする。それに、クラスの奴らの視線も和らいだ気がする。

A f t e r

「僕達、397名は今日、各々の新しい道への一步を踏み出します。……卒業生代表　神城龍貴」

あれから、一年と数カ月。俺は桐西や他の奴等から勧められ、弓道部に入ったり、生徒会長をやってみたりした。そして今日、無事に卒業式を迎えたのだった。

「はあ。卒業、かー。たっちゃんとも離れる事になっちゃうねー。

残念」

「ああ、そだな。まあ、そのうちまた会えんじゃん？」

「まあ、それもそうか。……そだ。たっちゃん、将来何になる？」

「ん？ まだ決めてないけど？」

「そうなの？ じゃあ……何か人を助けるような仕事しなよ！」

「はあ？ 無理ムリ。俺には向いてないよ」

「えー。絶対たっちゃんはそういう事やるべきだよ。僕も頑張ってみるからさ」

Now

「ふわああ。よく寝たあ」

——何か懐かしい夢だったな。目覚ましにテレビをつける。ピッ。

『では、次のニュースです。〇〇大学の研究チームがこの度、新型の介護ロボットを発明……』

そこには、笑顔のあいつがいた。

「……真晴も頑張ってたのか。じゃあ、俺も行きますか！」

あの時、真晴があんな事を言ってくれなかったら、俺は今こんな仕事をしていないかもしれない。全ては、あいつの一言。俺の日常に起きた、ささやかな出来事。それだけで、人生なんていうモノは180度転換しちゃう。

だから人生は面白い！ と、誰かが言った。

うん。全く、その通り。

「さて、今日は迷子の猫探しからだな」

翔け出しで、しかも雇われの下っ端探偵だから、まだ難事件には出逢ってもいない。

けど、ほんの小さな事でも、俺のした事で誰かが幸せになってくれ

たら……。

そんなささやかな夢を描きつつ、俺の“日常”は勝手に進んでいく。

maneuver

私は彼を愛し、彼女も彼を愛した。
私は彼を怨み、彼女は私を憎んだ。
よくある情愛の繾綣、三角関係。今、その関係に、終止符が打たれようとしている。

ある日、彼からメールが来た。

「……明日、3時に喫茶メルトダウンで待っている」

——嗚呼、そうか。やっと決着を付ける気になったのか。
メールを送り返し、もう一通、メールを送信すると、私はふう、とため息をついた。

——思えば、彼と初めて会ったのは、あの店だったな。

あの時、彼女、^{キラ}眺も一緒にじゃなかったら、こんな事にはならず済んだのだろう。

3カ月程前。

大学時代からの友人、眺から、久しぶりに連絡があった。仕事で私の会社の近くまで行くから、会いたいという事で。それで私は、とつさに会社近くの行きつけの喫茶店を指定した。少々値段は張るが、落ち着いた雰囲気で美味しい珈琲が飲めるので、人と会う時はよく利用させていただいている。だから、その時も、いつもどおり、何の迷いもなく、そこを指定した。

私が入った時には眺の姿は無く、見知った顔の常連客と見覚えの無い、20代のサラリーマンしかいなかった。彼女が遅れてくるのはいつもの事なので、とりあえず席に着き、マスターお勧めのブレンドコーヒーをブラックで飲みながら、のんびり待つ事にした。

「ごめーん、待った？」

30分程経ってから、彼女はやって来た。自分から誘つといて、

と思いつつ、私は手を挙げて合図する。

「いやあ、担当してる作家先生が、切守ってくれなくってさあ」

などと、言い訳しながら私の方に近づいてくる昞。当然、注意力は散漫。予想された事ではあったが、案の定、カウンターに座っていたサリーマン風の若い男にぶつかつた。男はちょうど、カップを口に運んでいて、ワイシャツにすっかりばっちりとコーヒーがかかる。その茶色いしみは、なかなか頑固そうだった。

「ご、ごめんなさい！」

—— あっちゃんあ。全く、昞は相変わらずなんだから。

昞の不注意とはいえ、私も一応、謝りに行く。

「すみません……。大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。そんなにお気になさらず」

笑顔の爽やかな、優しそうな、良い男。それが、昞^{シキ}だった。私は彼に惹かれた。

そこで私は、珈琲をこぼしてしまつたお詫びだ、と言って、彼を食事に誘つた。

その後も何かとかこつけて彼を食事に誘い、その後も何度もメールのやり取りをしたり、お酒を飲みに行ったりした。

そして、とうとう一カ月前、私と昞は付き合う事になった。

でもそれは、昞も同じだったのだろう。

翌日。私は少し早めに家を出た。他に用があつたからである。

だが、店に着くと二人はもう、そこにいた。

「あら、誰かと思えば……。よくまあこのことやって来たものね、^{アン}晏」

先制攻撃を仕掛けてきたのは昞。いつも通り、お得意のジャブに見せかけたストレートを放つてきた。

「特に悪い事をしたつもりはないもの」

それを余裕で受け流す私。このやり取りは慣れたものだ。すかさず、昞は次の攻撃に移る。

「はあ？ 何言ってるの？ あたしが何も知らないとも思ってるの？ ゼーんぶ、昶君から聞いているのよ？ どーせ、あんたが一方的にしつこく迫ったんでしょ？！ この、行き遅れ」

むつ。年は一緒じゃないか。負けじと私も言い返す。

「そんな事してないわよ。それに、陰でこそこそ付き合ってたのは、あんただって同じじゃないの？」

「同じじゃないわ！ 昶君はあたしを選んでくれたんだもん。ねー？」

「あ、ああ……。」

「……そう、なの？」

歯切れの悪い昶。その姿を見て、一瞬ひるむ。それを見逃さず、一気に畳み掛けてくる昶。

「そーよ。大体、あんたなんか昶君と本気で付き合える訳ないじゃない！ それに、どっから嗅ぎつけてきたんだか、あたしに嫌がらせまでするし。」

「いやがらせ？」

それは聞き捨てならない。私は性悪かもしれないが、根暗ではない。嫌がらせなら堂々と、正面からさしでやる。

「あんた、あたしのマンションのポストに“死ね”だの“泥棒猫”だの書いた紙入れたでしょ？とぼけても無駄。さあ、さっさと白状しなさい！」

？ どういう事だ？ さっきまでは私もついカツとなって言い過ぎてしまったが……。少し冷静になって考えてみると、矛盾だらけだ。でも、彼女が嘘をついているとは思えないし……。

うーん、と考えを巡らせていると、先程から口数も少なく、何やらおどおどしている男が目に入った。普段は饒舌な彼が珍しいな……。って、嗚呼。成程ねえ。信じていたかったけど、やっぱり……。

そうか、そういう事ですか！

「昶、少し、私の話を聞いてくれない？」

さあ、仕切り直し。ここからは私のターンだ。

「何？　ようやく謝る気になった？」

「そうじゃないの。でも、大事な話。大丈夫、私もう彼の事好きじゃないから」

「？　どーいう事？」

「理由は後で。その前に一つ、聞かせてくれる？　昞から、私の事を聞いたって言うてたよね？　それって、どんな風に聞いたの？」

「どくなって……。メールが来たのよ、昞君から。」

“ 実は僕、昞ちゃんに好かれちゃったみたいで……。本当に好きなのは昞だから、昞ちゃんを説得するから君も立ち会ってほしい。明日、3時に喫茶メルトダウンで待っている”

って。でも、詳しい事聞きたかったから、二時間前に来てもらうようにしたの。それで、昞が昞君の周りを付きまとってると聞いて

……」

へえ。昞にしては冷静だったな。きっと、昞はある事無い事吹き込んだんだろうなあ。ん。だから昞、最初から戦闘モードだったのか……。

「それで、二人とも早かったのね。で、そのメール、まだある？」

「え、ええ。……これよ」

昞も、私が何か違う事に気が付いたのだろう。それとも、私が昞を好きではないと言った事が聞いたのだろうか。さっきまでの気合はどこへやら、急にしおらしくなって、大人しく私に携帯を差し出す。

そして、私は事の次第を完全に把握した。

「私もね、同じような文面で昞からメールが来たの。違うのは、名前だけ」

私も昞に携帯を渡す。自分のと見比べた昞は、最初は青ざめた顔をして、

「ホントだ……。何で……。どうして……」

などと言っていたが、徐々に紅潮していつて、

「ねえ！　どういう事なの？！」

と昀に詰め寄る程にまで回復した。うん、それでこそ昀だ。

ギャンギャン、キュウン。

さて、私も参戦するか、と口を開きかけた時、

「まあまあ、落ち着きなさい。」

と、後ろから声が聞こえた。誰？　と思った時には、その人物は昀の隣まで来ていて、私達の目の前で笑っている。

『！？』

驚く昀と昀。声の主は、奥の席に座っていたおじいさんだった。

……まあ、いきなり知らない老人に痴話喧嘩（？）を止められたら、吃驚するよなあ。

「どちら様ですか？」

二人は怪訝そうな顔をしていたが、私は不思議と彼に見覚えがあった。

「もしかして……、龍貴くん？」

「ご名答」

そう言った時には彼は老人ではなく、普通の青年になっていた。

ぽかん、と開いた口が閉まらない様子の昀。まあ、彼にしてみれば、変な不確定要素が増えたのだから、致し方あるまい。だが、老人が青年になるマジックショーを直前に見た割には、昀の方は冷静だった。

「晏、知り合いなの？」

「うん……。彼は、神城龍貴君。ちょっと、頼み事をしていたの」

「たのみごと？」

「俺、探偵なんです。今回は友人として、少し、その方を調べさせていただきました」

昀の方を指す龍貴君。一方、指された昀は子犬のように、ぶるぶると震えている。

……私、どうしてあんな奴が好きだったんだろう？

そんな事を考え出したらキリがないので、私は無理矢理話を進める。

「彼の働いている探偵社の所長とは幼馴染でね。その関係で、龍貴君とも親しくなったの。……ちよつと、昞が他の女という所を見ちやつてね。それで、調べてもらつてたのよ。本当は、貴方達と会う前に、結果を教えてもらはずだったんだけど……」

昞達が予定していたよりも大分早くここに来てしまつていたので、聞きそびれてしまったのだ。

「じゃあ、まだ聞いていないのね？」

「ええ。さあ、龍貴君。聞かせて、くれるかな？」

虎と獅子が同時に居るようなプレッシャーを感じながら、龍貴君は話し始めた。

「……はい。少し、というか大分言いづらいのですが、この方、貴女方以外にも交際していた女性がいらつしやつたようなんです」

「じゃあ、あたし私達、3マタかけられてたつて事！？」

「いえ、……あの、その……5マタ、デス」

「はあ？」

「そーいう男だったのよ。それに、嫌がらせの犯人も多分こいつよ。だつて私、昞の家知らないモノ」

「あつ……。そういえば、東京来てから教えてなかったね」

「そーいう事。で、昞。こいつ、どーする？」

「そおねえ。純情可憐な乙女心を弄んだ責任は、取ってもらいましょうか？」

殺氣立っている女は本当に恐い。何も持っていないのに、刀の切っ先を向けられているような気分になる。そのプレッシャーに耐えきれなくなつたのか、昞は今日初めて、自分から口を開いた。それが、火に油を注ぐ、あるいは、獅子に縋馬を差し出す、事になるとも知らずに。

「……済まなかつた。で、でも、仕方なかつたんだ。ちよつと声を掛けただけなのに、ちよつと優しくしてやつただけなのに、皆すぐ本気になるから……」

しどろもどろ。眼は目まぐるしく泳ぎ、口からは言葉にならない

声が溢れ出ている。

そんな情けない男に、私達は最大の賛辞を述べる。

『最っ低』

「あんた、このままずるやっていくつもりだったの？」

「いや、そろそろ一人に絞ろうかと。最近、すごく可愛い子を見つけて。それで……。二人を仲間割れさせて、ついでに僕の事も忘れてもらおうと思って……。後は君達だけだったのに。そしたら上手くいったのに……」

「あっきた。ま、こんな奴に引かかってたあたし達も、あたし達ね」

「はあ、と憂う乙女。しょぼん、と肩を落とす青年。そこに割って入ったのは、意外にもあの探偵さん。

「ちなみに、その一人、とは？」

聞かなきゃいいのに……。とも思ったけど、自分達を振ってまで正式な交際をしたかった相手とは果たして、どんな奴なんだろう？と、少し気になったので、昀の言葉を待つ。

……これで、ものすごいブスとか、デブとかだったらどうしよう？

「多香美、月城多香美っていう、女子大生」

女子大生か……。なんか、そのブランドだけで負けた気がする。

そりゃ仕方ないかあ、と、私と昀が納得しかけた時、

「はっはっはっ！ こいつは傑作だ！」

と、龍貴君がお腹を抱えて、臍で茶を沸かしかねない勢いで笑い始めた。えっ？ 何で龍貴君がそんなに笑ってんの？ “つきしろたかみ”って、誰？ ツキシロタカミ……。カミシロって、まさか！

『それって、龍貴君！？』

「ぴーんぽーん、いやー、やっぱり、尾行だけじゃキツイ部分があったんで。でもまさかそんなに見事にハマってくれたとは……。

あ、ちなみに、コレが俺です」

渡された写真には、下心見え見え、鼻の下伸ばしっぱなしの昀と、女子大生風の可愛い女の子が写っていた。これが男かよ……。

あれ？ でも、この子どつかで……。

昶は放心状態で、開いた口が塞がらないようだ。……まあ、気持ちには解らなくもない。

私達は私達で、こんならマタをかけた拳句、女装男子にハマった男を好きになつていた怒りと、男に負けたというショックが頭の中をぐるぐる回り、ぼけーつとしていた。

が、だからと言ってこの男が悪いという事実には変わりはない。

「昶」

私は長年の好敵手に声を掛ける。

「そうね。久しぶりに、やりますか」

二人揃つて、奴の前に立つ。ひっ、と息をのむ昶。うん、そのリアクションは正しいよ。……まあ、だからと言って、私達の攻撃から逃れられる訳では、無いんだけど。

ふう、と軽く息を整えて、拳を構える。そして……

「この変態——！！」

ドカツ。バキヨ。メキヨ。ドサツ。……ピーポーピーポー……。

こうして、彼に全治一カ月超の傷を負わせ、私達は笑顔で帰って行った。

言い忘れていたが、二人とも大学のボクシングサークルに入っており、学生時代は“双頭の女豹”と呼ばれ、敵う者無しと言わしめた最高のパートナーであり、最大のライバルであった。理系の私と文系の昶。学部の違いが二人が出逢えたのも、そのお陰なのである。

数日後。龍貴君にお礼を言う為に、私は彼の所属する事務所を訪れた。コンコン。はぁーい。どーぞー。ガチャッ。

「あら、晏姉。ご無沙汰してます。ごめんなさいね、たっちゃん、今出掛けてるの。まあ、もうすぐしたら帰ってくると思うから、座って待ってて下さいな。今お茶入れますから」

入って来たばかりの人間を即座に誰か判断し、さらにその人の目的

まで見通して適切に対応する……。

「流石、真帆。相変わらずね」

成田真帆。 齡23にして、ここ、成田探偵事務所の所長を務めるキレ者。 昔ご近所に住んでいたよしみで、未だに困った事があると相談に乗ってくれる。 ……くつ、4つも真帆の方が下なのに……。それはともかく。

「ねえ、アレって、真帆だよな」

「ふふつ。 流石晏姉。 やっぱり解っちゃうものかあ、残念」

舌をペロツと出して、頭を手でこつんとしながら言う様は、確かに女子大生にも見える。 だが……

「あのね、元々、私は貴女の師匠なんだから、それぐらい解らなくちゃ仕方ないでしょ？」

「はい。 済みませんでした」

真帆が探偵を志したのは、まあ自分の父親がやっていた事も大きいだろうが、半分くらいは私の責任だ。 何故なら、私が今勤めているのは――

ブーブーブー。 あ……

「お仕事ですか？」

「ええ、そうみたい……。 じゃあ、龍貴君によろしく。 あ、私の正体は」

「解ってます。 では、行つてらっしゃい」

ガチャ。 外に出て、会社に着を向けながら、電話に出る。

「状況は？」

『頭を強く打ちつけられています。 何者かによって殴られた跡があります。 凶器はまだ、発見されていません』

「解った。 私が行くまで、現場保存しとけ」

『はっ』

ピッ。

……はあ。 こんな殺伐とした日々を送ってるから、あんな変なのにつつかかんのかな？

「おい、鑑識。早くしろー」

「ういーっす」

そして、私は今日も戦場へと駆り出される。

周りにはおっさんと犯人と被害者と血しかない中で、私は果たして、幸せを掴めるのだろうか？

「はあ」

思わず、溜息がこぼれる。

「先輩、すみません、今日非番だったのに……」

「ああ、いいのいいの。こういう仕事だからね。休みなんてあつて無いような物だからね」

「はあ。でも何か悪いんで……。そうだ、今日、何か御馳走しますよー！」

「……仕事、早く終わったらね」

「はいっ！ 頑張りまーす」

人生、悪い事が起こった後には良い事がある物だ。

という事は、次は良い事が起こる！ はず……だよな？

晏が去った事務所にて。一人の女性が呟いた。

「しっかし、晏姉も物好きだよなー。女だてらに科捜研なんて……。まあ、そのお陰で私は仕事にありつけたり、情報集めが出来たりするんだけどね」

その人は椅子に座ったまま、来客用に入れた珈琲をすすり、続ける。

「ま、私も人の事言えないけど。さ、仕事仕事」

そして彼女達は今日も、少年の知らない所で暗躍する。

新米探偵心得帳

ガサガサ、ザッザッ、ゴソゴソ。

「うーん……いないなあ」

——この辺りだと思ったんだけどなあ。違ったか……。

「次は……あっちの公園を探してみるか」

——あー、もう、どこにいるんだよお。

「……そういえば、前にもこんな事があつたなあ」

*

あれは、俺が探偵になる前。探偵を志し、その道で知らない者はいないとまで言わしめた孤高の名探偵、成田賢吾さんの弟子になりたくて、彼の事務所を訪れた時の事だった。

「悪いな、駄目な物はダメ。ムリな物は無理。俺は弟子は取らんよ」

「そんなあ……。そこを何とか」

「俺のやり方は、俺にしか出来ない。それを学んでも、君の為にはならない。第一、俺は娘にも何にも教えていないんだ。それが、いきなり弟子を取った、なんて事知られたら、今でも愛想尽かされているのに、更に呆れられちまうよ」

「そう、ですか……」

「そうなんだ。すまん」

「分かりました……。また来ます」

「何度来ても同じさ」

——はあ。そんな物なのだろうか？でも他に当てもないしな。どうしよう……。

そんな事を思いながら賢吾さんの事務所を後にし、とぼとぼと歩いていると

「おーい」

上から声がした。見ると、先程までいた事務所の窓から、賢吾さんが顔を出している。

「ちよつと来ーい」

ま、まさか！？ 俺は目を輝かせて、来た道を猛ダッシュした。階段を一気に駆け上がり、ドアを開ける。

「はい！ 何でしょう！？」

「……早」

賢吾さんは若干呆れていた。だが、息切れ一つしていない俺を見て、態度を改める。

「お前……体力はありそうだな」

“君” からいきなり“お前” 呼びになったのはきつと認めてくれた証だ、と思い込んで、素直に受け取りスルーする。

「はい。高校の時、弓道部の主将でした」

そこから賢吾さんの質問攻めは始まった。

「今まで他の探偵事務所で働いた事は？」

「ありません」

「初めてで俺の所に？」

「はい。賢吾さんは昔から俺の憧れの人だったので、弟子になるなら賢吾さんが良いと、ずっと考えていたので」

「何故、そこまで俺に拘る？」

「賢吾さんは、警察庁に居たにも関わらず、突然刑事を辞め、独立なさいました。その男気と、証拠を足で集めるひたむきな姿勢に惚れたんです」

「いや……、そんなに格好良い事はしてないんだけど……。よし、ラスト！ どうしてお前は、探偵を志す？」

「……誰かの役に立つ事がしたいから」

「何？」

「友達と、約束したんです。将来、人の役に立つ仕事に就こうって」「それが、探偵だったと？」

「はい」

確かに、他にもいろいろ選択肢はあった。でも、俺は探偵になりたかった。探偵なら、組織やらに囚われず自由に捜査出来るし、何より依頼人に親身になって事件を解決する事が出来る、そう思った。有名になってバシバシ依頼を、難事件を解決してやる！

その頃の俺は、それぐらいにしか考えていなかった。でも、その想いだけは本物だった。

賢吾さんはしばし考え込んでいるようだったが、やがて

「お前、名前は？」

と、本来ならば一番最初に聞いておくであろう事を今更聞いてきた。

「神城龍貴、と言います」

「龍貴、ねえ。よし、その心意気は気に入った」

「じゃあ「おーっと、弟子にする訳じゃねーぞ？探偵度チェックをしてやるだけだ」

「？ 探偵度チェック？」

「ちょうど、お前にも出来そうな依頼がある。コレを見事、やり遂げてもらん」

差し出されたのは1枚の紙。

「さ、行った行った」

「は、はい」バタンつ。

「さあて、俺も仕事仕事」………って！ 間違えた……。まあ、いつか。」

俺に渡された紙には、あるトラ猫の写真と特徴、おおよその行動範囲が記されていた。

どうやら、この猫を探せ、というのが課題らしい。

——これだけ書いてあれば、楽勝じゃね？こりゃ、今日中、いや、二時間もあれば終わるな。

と、意気揚々、ルンルン気分で現地に向かったのだが……。

カーカー！。

鳥が鳴いても見つからなかった。

——何故？でも、見つかりませんでした、じゃ話にならないし……。第一、依頼人に悪い。

幸い、依頼書には“何日かかっても良い”と書いてあったので、俺はそのまま何の報告もせずに捜査を続行した。

2日目。行動範囲を中心に聞き込み。目撃証言を元に搜索。トラ猫の多さを知る。

3日目。ホームセンターでかごを購入。中にキャットフードを入れ、即席の罠を張る。

4日目。キャットフードだけ食べられる。ノラ及び半ノラ猫の賢さの前に玉砕。

5日目。初心に帰り足で搜索。今度はより丁寧に。細い路地裏、植木鉢の陰、ゴミ箱の中、車の下、お店の中……etc. さらに、搜索範囲を広げて見る。

そして――

ガチャ。

「み、見つかりました」

「え？ まじで？」

「ご確認を……」

6日目、17時。

ようやく、俺はそれっぽいにゃんこ様を捕獲する事に成功したのだが……。

「え？ 間違ってた？」

何やら賢吾さんの表情が優れない。まさか、違うにゃんこ連れてきちゃった！？

「いや、合ってるよ」

あー、良かったあ。少しほっとする。

「龍貴、お前すげえな……。ちなみに、どうやって捕まえた？」

険しい声のままで賢吾さんが言うので、俺はそのままありのままを包み隠さず言った。

すると、うー、と唸って

「まあ、座れや」

と、手近な椅子を俺に勧めた。

——何かヤバい事しただろうか？　ってか、賢吾さんのキャラがつかめない……。

そんな事を考えながら、ドキドキしながら言われるがままに座る俺。そして、大人しく座ったのを見届けてから、賢吾さんは話し始めた。

「まず、総合評価：60点。とりあえず、合格点だ。で、その内訳は、まずあの猫だが、あれは俺の所に1カ月前に依頼が来た1年に1度大冒険する猫、トラ丸君と言って、難易度A級、この業界じゃ知らない者のいない、king of 迷い猫とも呼ばれる有名な超曲者迷い猫。かく言う俺も、1月探し回ったが見つからなかった。その点、6日で見つけたお前は、よく頑張った。まあ、きつと、ちようどトラ丸が帰ってきた所だったんだろがな。運も実力のうちって事で、そこは褒めてやる。けどよお、何故最初から本腰入れて探さない！　猫探しだからってなめてかったのか？　あ？　大体お前自分で言ってたよな？　足で証拠を集めるような探偵になりたいて。あれは嘘か？　罠まで張りやがって……それで捕まらなかったから良いものの、もし、怪我でもさせたらどうするつもりだったんだ！　お前、依頼人がどんな気持ちで俺達に頼みに来てると思ってるんだ！　お前にとっちゃただの猫でもな、依頼人にとっちゃ家族同然なんだぞ！　それを……まるで害虫みたいに扱いやがって。いいか、俺達の探す物は、例え時計だろうが財布だろうがハムスタ―だろうが、それは“物”じゃねえ！　俺達は依頼人の想い、信頼を買って、それを成果で返す。そういう仕事してんだ！　それにふさわしい扱いするのが当然だろうが！　そういう、依頼人の小さな声を疎かにするようななら、お前に探偵になる資格は無い！　あんなテレビドラマに出てくるような難事件を解決したいんだったら、探偵なんて辞めちまえ！」

……一気だった。あれだけの量を、賢吾さんは噛みもせず、つかえもせずに一気に言いきったのである。それは、今の科白を何回も何遍も行ってきたのだ、と俺に信じさせるには十分すぎるほどに充分だった。賢吾さんは、こうやって今まで指導をしてきたんだな——やっぱり、本物だ。

俺みたいな素人の餓鬼に、あんなに熱く、あんなに真摯に叱ってくれる。それが何だか、とても嬉しくて、同時に、今までの自分を恥じた。

——俺には、ここに居る資格すら、もうないな。

せめて最後ぐらいは、と精一杯言葉を紡いで、格好つけて言った。「……賢吾さんの言う通り、俺には資格なんてないのかもしれない。でも、もっと勉強していつか必ず、立派な探偵になってみせます。どんな小さな声でも、聞きとげられるように努力します。ありがとう、ございました」

深々と礼をして、立ち去ろうとする。

「お、おい、ちょい待て」

……またしても制止がかかった。

「まあ、今のはちょいと言い過ぎた。それに、お前に素質が無い訳でもなさそうだ。そこで、だ。今回トラ丸を無事に探してきてくれた礼、っちゃんだが、俺の知り合いの探偵を一人、紹介してやる」
「え？」

「お前、行くとこないんだろ？」

それって……、つまり、賢吾さんが俺を認めてくれたって事？

……や、やったー！！

叫び出しそうになるのを辛うじてこらえて、

「ありがとうございます！」

再び礼。やったー！これで、俺も晴れて探偵になれる！

「ま、詳しい事はあいつに聞いてくれ。これ、住所な」

「はいっ。ありがとうございます。俺、頑張ります！」

三度目になるお辞儀をして、俺は紹介された住所の元へと急いだ。

「……まあ、龍貴なら、あいつとも上手くやるだろう。多分。一応、連絡ぐらい入れとくか……」

俺は受話器を取ると、ほとんど連絡をしていなかった番号をプッシュした。

「もしもし、ああ、俺だ……」

紹介されたのは、隣町のアパートの一室だった。本当にこんな所が？　とも思ったが、玄関に“成田探偵事務所”と書かれた小さな看板が出してあったので、とりあえず、俺は呼び鈴を鳴らしてみた。ピーンポン。はい。ガチャ。

「こんにちは。さあ、どうぞ。お入りください」

「……お邪魔します」

「えーと、珈琲で良いですか？」

「は、はい」

「すぐ入れますから、そこに掛けて待っていて下さい」

迎えてくれたのは、まだ20代前半ぐらいの、綺麗というよりは可愛いという形容詞が似合う、年若い女性だった。この人が探偵……？　そういえば、賢吾さんにはお嬢さんがいると伺った事がある。もしかして

「あの、失礼を承知で伺いますが、貴女は成田賢吾さんの「娘」に当たります」

——やっぱり……。という事は、賢吾さんはわざわざ娘さんを紹介してくれたのか。何と身に余る光栄！　しかも、賢吾さんのお嬢さんと言えば、安楽椅子探偵で有名なルーキー。この人の元で働けるなんて……。よし、頑張るぞー！

と、気合を入れた時、

「で、何のご用でしょう？」

出鼻を挫かれた。でも、めげずに俺は言う。

「俺、神城龍貴って言います。今回は賢吾さんからの紹介で、ここに来ました」

「ああ。じゃあ、父さんが言ってた探偵志望の少年、というのが「俺です」

「成程ねー。さては、父さんにコテンパンにやられたのねー。で、それで勢いづいたって所かしら。でも君、素質はあるみたいね。安心したわ」

「はい。……あれ？そんな事まで言っただけですか？」

さっきの感じだと、俺の名前はおるか、顔も知らないようだったのに……。

「いえいえ。父さんは何も。ただ、“近々探偵志望の少年がお前のところに行くから、面倒見てやってくれ”って」

「それだけで解るものなんですか？」

「まず、君の靴と服。割と新しそうな物なのに、泥や傷だらけ。きつと、父さんのしごきを受けてきたんだって。でも、君は父さんから連絡を受けてから1時間も経たないうちに来た。これは相当やる気のある証拠」

「素質があるっていうのは？」

「ふふ。父さんはね、ああ見えてもプロよ。ちゃんとした子にしか、ここを教えたりはしないわ」

まあ、殆ど勘みたいなものだけだね。と最後に笑ってしめた。うーん、流石だ。それに、賢吾さんは“愛想尽かされてる”とか言ってたけど、ちゃんと信頼関係はあるんだな。何か、羨ましいな。

「では、たっちゃん。成田探偵事務所へようこそ」

「はい、よろしく願います！」

かくして俺は、探偵としての第一歩を踏み出したのだった。

*

「そうだな。あの時に比べれば……。よし！ 頑張るぞー」

気合を入れ直し、俺は搜索を続行した――。

「まあ、そんな訳でたっちゃんはうちに来たのよー」

「へえ、そうなんですかあ」

「た、ただいまー」ぐて。

「りゅ、リュウさん!？」

「あらあら、ご苦労様。今、何か美味しいものを作りますね」

俺が1匹のカメと1頭の犬、1羽のインコを探し終えてへとへとになって事務所に帰ってくると、俺の従妹の幼馴染、潤が遊びに来ていたらしく、ぐてと倒れ込んだ俺とペット達を運び入れてくれた。「さんきゅー。……で、成田さん、さっきの話って」

「ああ、潤君がどうしてもたっちゃんがうちに来た訳を知りたい、って言うので、お話してたんですよー」

「すみません。気になっちゃって」

「いや、良いよ」

しかし、奇遇だな。俺も同じ事を思い出しているなんて……。

「さ、出来ましたよー。お疲れ様でした」

でん、と置かれたのは特大のオムライス。ちなみに俺の大好物。

「いったただつきまーす」

これがあるから、どんなきつい仕事でも、頑張ろうという気になる。

前述したとおり、成田真帆は安楽椅子探偵だ。推理専門。ほとんど自分で動くという事をしない。だから、必然的にペット探しや浮気調査は俺の仕事となる。が、だからと言って真帆さんが何もしていない、という訳ではない。行動範囲やちょっとした仕草から、大体この辺を張っていれば良いだろう、という的確な指示や、依頼人の警戒を解き、安心させるというのは俺には出来ない事だ。

だから、まあ相性は良いんだろうな……。俺も、大分楽しくなってきたし。最初はそりゃ、きつかったけど。それに、真帆さんは俺を全面的に信頼し、横槍なんかは入れないでくれるので、本当にあ

りがたい。

本当に、良い所長だ。

そんな真帆さんの特技は、人の心を読む事。

「さ、これ食べたら次のお仕事がんばりましょー」

……真帆さん！！！！

悲鳴は、心の中だけに留めた。

そして今日も俺は、元気に猫探しを開始する。

成田親子からいただいた、格言を持って。

そんな一新米探偵の俺が、本当に難事件と呼ばれる事件に巻き込まれるのは、まだ先の話。

その時に訪れる困難と苦悩と悲しみを知らずに、俺は今日もひた走る。

よくわからない解説。 (前書き)

第五話で、“神城龍貴の日常”本編は終わりです。以下、解説となります。

最後にお読みください。

よくわからない解説。

えー、まずは“神城龍貴の日常”、最後まで読んでいただき、誠にありがとうございます。

やった！ちゃんと書ききったよ！

…っていうか、5話で書ききったと言うなって感じですよ。

以下、解説というか、裏話となります。もう少し付き合ってやるぜ！という心の広い方は読んでやって下さいまし。

【全体を通して】

シリーズものと謳っていたこの“神城龍貴の日常”ですが、実は龍貴メインの話って、2話しかないんですよ。というのも、これは作者の好みなんです、たまにこういう風に、

“他の人の目線から主人公の性格、特徴を浮かび上がらせたい！”
と思ったりしちゃうわけです。というか、語り部に自分の説明させるのが嫌いだからかもしれません。

ってな訳で、主人公が主役になるわけではないシリーズものは幕を開けたのです。

1【素朴なギモン】

えー、実は、この“素朴なギモン”と、第2話“運命なんて信じない。”は、元々龍貴を主人公？にしたものではありませんでした。というよりは、龍貴が出てくる話ではありませんでした、と言った方が正確ですね。当時（多分中3か高1だと思つのですが）名前を、特に男の子の名前を考えるのがすごく面倒だったので、すっごい適当に付けていたら…

他のこれから出そうと思っている話の主人公とかぶりました。

で、じゃあこれから新しく考えるよりは龍貴を使おう！という事で、シリーズの中に入れてみました。我ながら安易すぎるよ……。まあ、割とすんなり馴染んでくれたので良かったです。

ちなみに、お気付きの方もいらっしやるかとは思いますが、1話と2話はほとんど同じシチュエーションです。直す前のはほぼ、目線を変えただけでも言えなくもない。

その辺は次で説明します。

2【運命なんて信じない。】

まあ、殆ど上記で説明してしまいましたが、直した率はこちらの方が高いです。

で、さつきつから“直す”ってなんやねん！と思いの方もいらっしやると思っているので、その説明を。

えー、僕は最近まで、具体的には1月ほど前まで、家にPCが無かったので、それまではずっと、紙とペンを使って書いていました。で、その大量の紙媒体小説達をここ1月ほどで“直し”ながらデジタルな媒体にしていたのです。まだ終わってないけど。

そんな訳で、元々の原稿からかなり“直した”率が高い、という意味なのでした。

でも未だに、先に紙とペンでカリカリやってからじゃないと上手く考えがまとまらないので……。やっぱりアナログかつ執筆ペースが遅くなるんですね…。

しかも熟成（放置？）させるの好きなので、どうしようもないですorz

でも、コレ直すのは割と楽しかったです。ストーリーになりかけるほど誰かを愛し、また愛されてみたいなあ（え？）と思いつつ、次の“クロスロード”を見据えて書きました。

3【クロスロード】

時系列的には最終的にこの位置で良いのですが、回想シーンの大部分は2話よりも前です。

ってか、そんな事言っちゃったら1↓3↓2↓3↓5↓3↓4↓5とかいう妙な事になっちゃうんで、この順番（作品掲載順）は、最終的な時系列という事で納得して下さい。

…っていうか、僕基本的にK音好きですよ。神城、桐西、他にも3人ぐらいいるけど。何でだろ？作者本人に自覚症状はありません。ただ、“きーちゃん”という呼び方はすごくお気に入り、他のキヤラの愛称にもなっています。そのシリーズはまだ全く打ち終わっていないので、出すかどうかは微妙ですが。

あと、基本自分の学校が文化祭盛んだったからか、文化祭ネタも割と好きです。多いです。書き易いからなんでしょうかね？それにしても、この辺のネタは学生の心を忘れないうちに書きつくしたいものですね。

4【maneuver】

「喫茶メルトダウン」でピンときた方はご一報を！…うん、言いたい事はそれだけかな？（ちょ、）この話で初めて、龍貴は探偵っぽい事をします。緯月的探偵の仕事イメージは、浮気調査か迷子のペット探しなので、4話5話を使ってそれをやってみました。

尤も、実際の探偵が囃調査までするとは思えませんが。

あと、昞と晏のサークルは、空手と合気道とボクシングで悩みました。本当は晏の職業を警察関係者にした時点で変えようかとも思っていたのですが、科捜研ならいらなかな？と思ってそのままに。この辺は調べ不足なので、何とも言えないんですけどね。

とりあえず、真帆さんはこうやって情報収集をしているんですよ、という事を書きたかった訳なのですが、無理矢理感が否めません。

うーん…。

何か上手い書き方あれば教えて下さい。

5【新米探偵心得帳】

僕の中での“探偵”は、地域密着型、前述したような地味なお仕事をする方と、テレビドラマ等によく出てくる、いわゆる難事件を解決する方、この2パターンです。

賢吾さんはこの2つを満たしている格好良い探偵さんだと思っています。ただ、ちょっと熱過ぎるかな、という気がしなくもないです。それをふまえると、真帆さんの方が探偵らしいのかな、とも思ったり…皆様はどうでしょう？ご意見書いていただけると幸いです。

そつえば…実は、この第5話だけ、最近書いたものなんですけど…違和感ありました？

それと、最後に登場した潤君は、次回以降連載予定“season s”（と言っても、まだ打ち終わってなければ紙の方でも書き終わっていないのですが…）の主人公です。その中には龍貴も真帆さんも、もしかしたら名探偵さんや科学者さん、警察関係者なんかもでてくるかもしれません。まあ、気が向いたらですけど。お楽しみに！

あ、ちなみに、タイトルは語呂が良いんで一番気に入っているかもです。

【最後に】

ここまで長々と書いていてなんなんですけど、果たしてコレを読んでもくさっている方っていらっしゃるのでしょうか？不安ですよね…きっと、この長々とした駄文まで読んで下さっているのは少数派だろうな…。

てな訳で。ここまで読んでくれたそこのあなた！ぜひこの若輩者の

為に、評価をしてやって下さい。全身全霊で喜びます。そして執筆ペースが上がる…？かもしれません。どうぞよろしくお願いします。

ってな訳で、今回はここまで。次回作でお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3653k/>

神城龍貴の日常

2011年10月6日22時49分発行